

## 京都・近代絵画の記憶

### 2018年度活動報告

近世の京都は、江戸に次いで多くの画家が集住する日本絵画の中心地のひとつである。近代になると流入する西洋絵画に対して、自らのあり方をみつめなおす機会も増し、その結果として新しい日本絵画の様式が誕生した。東京と京都では画家たちの近代化に対する考え方も実践の方法も異なり、京都の日本画家たちに対して京都画壇という呼称も行われるようになる。今日なおこの言葉は生きているが、時代の流れの中で次第にその姿は変化している。本事業では、京都画壇を画家だけがつくるものとは考えず、それを支える諸業との関わりの中に成立するものとする。絵画が制作され鑑賞される京都という場の記録として、現在の視点から京都画壇にかかわる記憶を収集し、後世に伝えることを目的とする。

今年度考えたのは、近代の京都画壇において重要な役割を果たした評論家、学芸員の記憶の探索である。明治以降、美術の鑑賞には展覧会というシステムが定着する。展覧会は作家が作品を会場に並べて終わりではなく、観客の評判、報道する新聞や雑誌上での評論を含めたイベントである。そこには美術記者や評論家といった職業が大きな影響力を持っていた。また京都市美術館が1933（昭和8）年に開館し、独自の展示を行うようになると、そこで働く学芸員の役割が大きくなる。特に戦後は、学芸員の企画がその時代の美術の動向に影響を与えるケースも少なくない。

今回インタビューを行った加藤類子氏は、『虹を見る 松園とその時代』などの著書で知られる美術史研究者で、現在は染・清流館館長の職にある。1963年の国立近代美術館京都分館（現京都国立近代美術館）設置当初から定年退職まで同館で勤務し、京都の美術界を美術館の側から最も長く見てきた方である。さらに同氏の父・加藤一雄氏は『京都画壇周辺』などの著作がある美術評論家であった。加藤一雄氏は、本学の前身である京都市立美術工芸学校の学科教員、京都市美術館の職員を務め、戦前・戦後の京都の美術界と深く付き合ってきた。また、加藤類子氏には『京都画壇散策 ある美術記者の交友録』という編著書がある。これは大正から昭和期に活躍した美術記者の神崎憲一の活動を掘り起こし、様々な記事をまとめたものである。

加藤類子氏は自身の学芸員（研究員）としての長い経験のなかで、多くの作家とのつながりを築いてきたのはもちろん、歴代の館長—今泉篤男、河北倫明、小倉忠夫らが美術館運営にどのように当たってきたかもつぶさに見てこられた。また、幼少期より父一雄を通じて京都の画家たちとも付き合いがあり、さらにそうした仕事の先達である神崎憲一にも詳しい。そこで、今回のインタビューを通じて、画壇を支える重要な仕事である評論家、学芸員、記者から見た貴重な経験を生の言葉として記録しておきたいと考えている。

田島 達也（美術学部教授）